



子供たちを私のもとへ来させなさい

# Viator

VOL.009

## 聖ヴィアトールの記念にあたって

イブ・ボアベール神父

本日は、この教会の保護聖人の聖ヴィアトールの祭日という大切な日です。また、今日はこの教会の献堂20周年でもあります。この聖堂は、みなさん一人一人にやどる長年の信仰のたまものによって建てられたものでもあります。この小教区の司牧者として、皆様に心からの喜びの気持ちをお伝えしたいと思います。

私は40年前よりこの小教区で働いており、すばらしい歴史を経験してきましたし、大きな喜びや恵みも味わってきました。この小教区の歴史は皆様ひとりひとりと共に作られてきたものであり、またイエスがそうであったように、そこには十字架もありました。十字架とキリストと切り離すことはできません。また十字架は、教会や私たちひとりひとりとも切り離すことはできませんし、さらには生命とも、また私たち個人の歴史とも切り離すことはできません。

本日、この小教区の保護聖人である聖ヴィアトールを讃えるにあたり、聖ヴィアトールの歴史を紹介したいと思います。皆様の中には、新たにこの教会に来られた方や、近年になって洗礼を受けられた方がいると思いますが、聖ヴィアトールとはどのような人物か、ご存知でしょうか。私たちの修道会の創設者で、1793年にフランスのリオンに生まれたルイ・ケルブ神父はリオン教区の歴史をさかのぼり、信仰を広めるためにめざましい活躍をとげた聖人たちの事績を明らかにしました。そして、創設以降、リオン教区の教会を建てた多くの聖人や聖女の姿を語っています。そこで、それを参考に聖ヴィアトールについて振り返りたいと思います。

聖ヴィアトールは3世紀に生まれました。この若き助祭ヴィアトールをよく知るには、同時代の司教聖ユスト(300-390年頃)の伝記の一部をひもとかなければなりません。ヴィアトールはどのような人物だったのでしょうか。ヴィアトールはリヨンの教会の読師(朗読係)で、勤勉な人物で、キリスト教徒が増えつつある時代にあって、司教にたいへんな忠誠を尽くしました。

ここで少し歴史をお話しをしたいと思います。313年に、ローマ帝国のコンスタンティヌス帝はキリスト教徒に対する迫害に終わりを告げます。この頃から、壮麗で巨大なバジリカ聖堂が建てられるようになります。神の民はその立派な天蓋のもとに集まり、典礼を行っていました。司教が多くの聖職者に取り囲まれ、典礼祭儀の司式を行い、祭儀はますます頻繁になりました。しかしながら、この一方でリオンにもまだ異教は存続し、キリスト教徒はリヨンの下町に暮らしていました。350年頃、ユストという名の聖なる司教がリヨンの教会を司牧していました。この司教は優しく、謙虚で、愛にあふれ、あわれみ深い方でした。ユスト司教

にはヴィアトールという名の一人の若い弟子がおり、リヨンの司教座付属学校に通っていました。そして、数年後にヴィアトールは読師養成の学校に通うこととなります。この学校は、御言葉と祭壇に奉仕する若者を養成するために特別に作られたものでした。ヴィアトールはこの頃になると、深い信仰を持ち、善良な性格の若者となりました。そしてヴィアトールは高潔な霊魂を持っていたために、司教座聖堂の読師に選ばれました。これは大変に名誉なことでした。というのも、この時代は混乱を極めており、教会は聖職者の選択をたいへん慎重に考えていたからです。信心のまだ乏しかった時代にあって、読師の聖務とは司祭職へいたるための第一歩にとどまりませんでした。これは終身の身分で、深い学識と深い聖性を必要としたのです。若者だけではなく、あらゆる世代のキリスト者が読師に召されることに榮譽を感じていたのです。

読師の叙階は信徒の同意を必要としたので、多くのキリスト教徒が式に集まりました。これはまぎれもない選出でした。司教は、読師に選ばれた人に聖書の書き記されている朗読書を手渡し、読師は祭儀でそれを読むのです。さらにヴィアトールは読師として寄進を集め、貧者に配給しなければなりません。当時、貧者の数はたいへんに多いものでした。これらの仕事に加えて、ヴィアトールは公文書や私文書の記録を行ない、さらに聖書などの保管もまかされたのです。これは重要であると共に名誉な仕事であり、本当に責任の重い仕事でした。

祭儀の時に、ヴィアトールは朗読台に上がり、聖書の一部を読みました。また司教が説教をする時には、その前に立ち、聖書を朗読したのです。そして司教はその聖座より聖書を説き明かしたのです。ヴィアトールは司教の司式するミサでは祭壇の奉仕を行ない、神の民が典礼に与かる手助けを行いました。

ヴィアトールは典礼祭儀以外では、キリスト教徒の子どもたちにカテキズムを教える役割を果たし、また洗礼を受けたいと思う洗礼志願者にはキリスト教の教えを説きました。当時、洗礼は復活祭の前晩に行われていたのです。

さて、ヴィアトールの人生は悲劇的な事件のために、激変してしまいます。リヨンのある住民が狂気の発作を起こし、手に刃物を持ち、何人もの通行人を殺害したのです。そばにいた群衆は怒り狂い、集団となって犯人を追いかけ、すると犯人は司教座聖堂に逃げ込んだのです。人々は聖堂に敬意を払って、一瞬、その動きを止めました。しかし群衆の怒りは大きくなるばかりで、教会に火を放たんばかりとなりました。司教は、犯人を警察に引き渡すよう努め、また群衆に向かっては犯人に復讐をしないようとの約束を取り付け、司教は犯人を教会の外に出しました。すると群衆は殺人犯を取り押さえ、情け容赦なく殺してしまったのです。司教はこれを見て、このような不幸を許すことができず、これより自分が司教職にふさわしい人間ではないと思うようになったのです。そこで司教は遠方の土地に隠遁し、償いをすることにしました。そしてこの計画をヴィアトールだけに打ち明けたのです。司教は一人そっと真夜中にリヨンを出発し、ローヌ川沿いに歩きました。司教は人目を避けてマルセイユへと向かい、そこからエジプトへ行く船に乗ることにしました。

しかしヴィアトールは司教を父親のように慕っていましたので、司教にならい、その後にしたがおうと思いました。そこでヴィアトールもただちにマルセイユへ向かう決意をし、司教と隠遁生活を共にし、砂漠とともに暮らそうと思ったのです。司教はヴィアトールに出会って驚き、リヨンに送り戻そうと思いました。しかしヴィアトールは司教に懇願し、その前にひざまづき、とうとう同行することが許されたのです。この時から、司教とヴィアトールの生命はひとつのものとなりました。二人の心はこれまでになくひとつとなり、神に奉仕するとの理想に燃えて一致していったのです。

二人はエジプトに着くと、川をさかのぼり、セット地方にたどりつきました。エジプトとは、幼子イエス

が逃亡滞在した土地であり、イエスの滞在によって祝福された土地です。そこは、優れた完徳の修道士たちの暮らすことで有名な土地でした。二人は丘から遠く離れたところを選び、暮らすことにしました。静かな隠遁生活を送りたいと思ったからです。3世紀にはそこで多くの修道士が暮らしており、償いの業にはげみ、断食をし、孤独に祈りをささげていました。

聖ユストと聖ヴィアトールは修道院に入り、そこで亡くなるまで一生を過ごしました。二人の聖人はたいへんに堅いベッドや、地面にそのまま寝て休み、日中は祈りや手仕事にたずさわり、修道院に必要なものをまかないました。またヴィアトールは聖書を集め、写本の製作にも関わりました。当時の聖書はすべて手で写さなければならなかったのです。

ある日、リヨンからガロ・ロマン人の信心深い旅人が砂漠の修道院を訪れ、隠遁修道士の身なりをしたユスト司教とヴィアトール読師に出会いました。この日をおかきりに、人々は二人の聖人に敬意を払うようになりました。これはその頃の修道院のならわしでしたが、二人はそれでも祈りと償いの業を続けました。

聖ユストは長年の過労と、また労苦のたえない生活のために疲労困憊し、地上生活という巡礼の終わりにさしかかりました。ヴィアトールは聖ユストから残されて一人になろうというときに、思わず苦悩の叫び声を漏らしたのです。「父よ、どうして私を見捨てられるのですか。これから誰を頼りとして生きていけばよいのですか。」とヴィアトールは目に涙をうかべて告げたのです。「息子よ、安心しなさい。まもなく、あなたも私の行くところへ来るのだから。」と聖ユストは答え、聖ユストは10月14日に主のうちに眠りにつきました。そして聖ユストが亡くなってからわずか1週間後に、ヴィアトールも神に靈魂を返したのです。

ところが、この二人が英雄的な人生の末に、模範的な死を遂げたことを知ると、リヨンの人々は聖人の聖遺物を何としても手に入れ、崇拜したいと思うようになりました。そこでリヨンでは使節団が結成され、急いでエジプトへ向かい、聖人の聖遺物を持ち帰ろうということになりました。二人の聖人の墓を収めていた聖堂では、まもなく多くの奇跡が次々に起きるようになりました。そして、この教会には多くの巡礼者や司教、王子たちが数多く訪れるようになったのです。二人の聖遺物を収めていた教会は、まもなく聖ユスト教会という名前と呼ばれるようになります。

しかし、思いがけないことに、カルヴァン派の一団がリヨンに攻め入ると、運の悪いことに、彼らはこの聖人たちの聖遺物を冒瀆し、ごくわずかなものが残されるにすぎませんでした。その後のフランス大革命の時には、幸いなことに、聖遺物が再び冒瀆されることはありませんでした。

さて1831年にケルブ神父は修道会を設立し、会の保護聖人に聖ヴィアトールの名前を冠しました。このようにしてヴィアトールという名は1000年以上忘れられていた後に、再び歴史に現われたのです。これは教会にとって奇跡であり、ヴィアトールの名を持つ人にとっても、また聖ヴィアトール修道会員のよう、この聖人にしたがって歩む者にとっても奇跡なのです。

この新しい聖堂の献堂20周年を祝い、この小教区でヴィアトールの歴史がさらに知られるようになれば、私たち聖ヴィアトール修道会会員がどのような精神のもとに司教や教区、また教区司祭と、さらには修道会の創設者であるケルブ神父と一致しているかがご理解いただけることと思います。ケルブ神父は教区司祭として働き、典礼や若者に向けたカテキスムを行い、たいへんに優れた使徒職を果たしました。また、修道会の創設者として、修道士や周囲の司祭に愛されました。聖ヴィアトールの栄光を皆さんと共に祝いましょう。

聖ヴィアトール祭おめでとうございます。

## アジア・ユースデーに参加して

マリエッタ・N.Y.

アジアユースデー（2014年8月12～18日）に参加してきました。関西空港から仁川空港までおよそ2時間。アジア・ユースデーの開幕前日は、日本から一緒に参加して下さったキム神父様とチェ神父様に案内していただき、ソウルを訪れました。色々なお店や屋台で賑わう街中を歩き、韓国焼肉を食べ、京都教区の仲間と観光気分を楽しみました。ソウルの明洞大聖堂、チョンジュの殿洞大聖堂にも訪れ、お祈りをしてきました。

明洞大聖堂は大きなステンドグラスがとても立派でした。中はとても落ち着いた雰囲気ので心地よかったです。初めて来た場所でも、教会に来ると不思議と安心した気持ちになりました（写真①）。

13日から始まったアジア・ユースデーの会場は大田（テジョン）。大きなテントが、アジア22か国から集まった若者でぎゅうぎゅうになりました。朝はまず一番に皆でミサに預かります。

大田教区の司教様を主祭に、各国からの神父様達と一緒にミサを進めてくださいました。ご聖体拝領はとても時間がかかり、司教様のご聖体に至っては顔よりも大きく、とにかく規模が大きかったです（写真②）。

大会の間、およそ2千人の参加者が200のグループに振り分けられ、その仲間と一緒に分かち合いをしました。様々な国の人が混ざり合うグループで、日本語の通じる人はほとんどいませんでした。最初は話が全く通じないのではないかと不安でしたが、皆私が英語で話すのをじっと聴いてくれて、おかげで通じあうことができました。また、絵を描いて分かち合いをしたり、一緒にパズルを解いたりと言葉を使わずに協力するプログラムもたくさんあり、言葉の壁を越えて楽しめました（写真③）。

何と言っても楽しかったのが、ダンス。「Wake Up! Asian youth」というテーマソングがかかると、皆こぞって踊りだします。隣に居合わせた人たちとノリノリになって踊る度に、大きな会場が一つになるのを感じました（写真④）。

教皇フランシスコがアジア・ユースデーの会場にやってこられた時は、同時に開催されていたコリアン・ユースデーの参加者も一緒に集い、さらに大人数になりました。教皇様が会場に入って来られ、姿がスクリーンに映し出されると会場は熱狂に包まれて、まさにライブ！という感じでした。アジア



写真① 明洞大聖堂



写真② アジアユースデー会場



写真③ 分かち合い

ユースの代表者の悩みや質問にその場で答えて下さり、教皇様の言葉の力強さに惹きつけられました。(写真⑤)。夜にはフェスティバルが開かれ、色々な参加国から歌やダンスや伝統芸能、ミュージカルなどを発表してくれました。(日本からの出し物がなかったのが残念です。)プロの劇団や歌手もこのために来てくれて、夜中まで盛り上がりました。

初めて徒歩巡礼をしました。多くの韓国のキリスト教徒が殉教したヘミ城をめざして、殉教者の通った道を歩きました。はじめは巡礼中ってどんなことを考えるのだろうと戸惑いましたが、殉教者たちがどのような思いでヘミ城へ向かったのだろう、自分にとって今いちばん困難なことは何だろう、などとほんやり思いを巡らせました。自然の中を歩きながら夕日を見たり川の音を聴いたりして、心が研ぎ澄まされたような気持ちになりました。(写真⑥) 韓国出身者で初めての司祭キム・テゴン神父の生地を訪れ、お祈りをしました(写真⑦)。

最終日の 17 日は、ヘミ城で開かれた教皇様ミサに預かりました。教皇様がすぐそこにいる、というのがすごすぎて実感が湧かなかったのですが、お話をされる表情のやさしさや力強さにとても揺さぶられました。「アジアの若者たち、目を覚ましていなさい」と呼びかけてくださったことが特に印象強く忘れられません。

教皇様ミサの最後には、次回のアジアン・ユースデーの開催地の発表もありました。2017 年、場所はインドネシアです。

アジアン・ユースデーで、同年代のカトリックの人とたくさん友達になれました。国籍に関係なく同じ信仰を持っているということがとても心強く感じられました。日本に帰ってきてごミサに与ったとき、今アジアの友達も教会でお祈りをしているのだと考えてとても嬉しくなりました。また、自分の信仰に少し自信や誇りを持ってました。アジアン・ユースデーの参加をきっかけに、信仰をもっと深めたいと感じるようになりました。先日は西陣教会の望洋庵で行われた青年の為の黙想会に参加してきました。今まではお恵みを受ける一方だったのですが、同年代の人との交流を深めながら、自分からイエス様に近づきたいです。たくさんのお恵みももらってきましたこのような機会をいただいたことに本当に感謝しています。ありがとうございました。



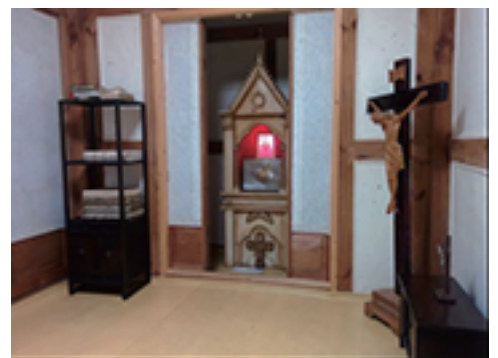
写真④ ノリノリの「Wake up Asian youth」



写真⑤ フランシスコ教皇様登場



写真⑥ ヘミ城めざして徒歩巡礼



写真⑦ キム・テゴン神父の生地

## 本年度の受洗者からの声

### 「感謝」 マリア・テレサ・H.K.

ボアベール神父様はじめ、良き信仰の友に導かれ、すべてを主の御心に委ねる日々が与えられました。この度の大きな恵みに感謝の日々でございます。これからも更なる信仰の歩みができますように、どうかよろしくお願いいたします。

### 「洗礼を受けて」 フランシスカ・Y.K

私は、洗礼を受けてから今日まで、子どもと一緒に神様を近くに感じられることを一番の幸せだと思っています。その理由の一つは、私が洗礼を受けたときに、子ども（長男）も初聖体という大きな恵みを頂いたからです。

二つ目の理由は、二人の子どものお陰で、私の心が神様に向かうようになったことです。私は自然と、自分が洗礼を受けることを神様が望んでおられると思うことができ、誰から勧められることなく、洗礼の日を迎えることができました。私は、これから子育てしていく中、ハッピーな時も、大きな壁にぶつかる時も、神様が子ども達だけでなく、私たち親のそばもいて下さることを実感しながら前に進んで行きたいと思えます。

## 洛北ブロック大塚国際美術館・鳴門教会巡礼ツアー

平成 26 年 6 月 14 日

T.A

洛北ブロックの信徒交流を促進する試みとして「大塚国際美術館・鳴門教会巡礼ツアー」が企画されたので妻と二人で参加しました。

当日は入梅前の比較的清々しい好天に恵まれました。朝 8 時半に衣笠教会に集合し、世話役の林さん（高野教会）からスケジュールの説明を受けた後、大型バス 2 台に分乗して 9 時に衣笠教会を出発しました。北白川、高野、西陣教会の約 20 名弱の参加者が同乗しましたが、北白川からの参加者は私達 2 名のみで、すこし寂しい思いをしました。車中では小立花神父様とシスター永田による聖歌の指導があり、名神高速道路西宮インター間での間皆で歌って過ごしました。西宮市内のコ



ンビニ駐車場で溝部司教様と合流し、阪神高速と神戸淡路鳴門自動車道経由で淡路島を縦断する間、司教様から四国にゆかりのあるディオゴ結城了雪（イエズス会司祭、2008 年「ペトロ岐部と 187 殉教者」の一人

として福者にあげられた) についての講話を聞きながら黙想をしました。了雪は足利将軍家の血筋を引く人物であることや、当時の都での勢力争いに破れたものが四国に流れたという時代背景を詳しく説明していただき、京都と徳島に深い関係があったことなどを知りました。また、高山右近の霊性についても黙想しました。

11 時半に最初の目的地である大塚国際美術館に到着しました。この美術館は大塚製薬(徳島鳴門で創業、オロナミン C やポカリスエットで有名) の創立 75 周年記念として設立され、西洋の約 1,000 点の名画が陶板焼で実際の大きさを再現されているのが特徴です。鳴門の海岸の砂を使ってなにか事業が出来ないかということがきっかけで陶板焼をはじめたそうですが、非常に大きな陶板(～3m) を割れずに焼くには高度な技術が必要で信楽焼の技術が使われているとのことでした。



古代から現代まで宗教画だけでなく様々な絵画が展示されているのですが、何と言っても圧巻なのはミケランジェロのシスティーナ礼拝堂の壁画です。実際のサイズを体感するとこのような壁画を作り上げるには相当な労力が必要だったであろうことや、全体を把握しつつ細部にわたって緻密な描写ができる能力のすごさに感動しました。昼食を挟んで 14 時までの滞在でしたが、とても 1,000 点全てを見る事は出来ず、次の機会には 1 日かけてゆっくり見たいと思いました。

美術館を後にし、第 2 の目的地である鳴門教会を訪問し、溝部司教様司式のごミサに与りました。ごミサ後、主任司祭の乾神父様から鳴門教会の歴史について説明して頂きました。オブレート会のブラザー津田が流浪の画家として鳴門を訪れ、絵を教えながら聖書の話をするうちに多くの人が集うようになり、それが教会として認可されたという特異な歴史があるそうで、非常に自由な雰囲気を感じました。乾神父様自身も子供のときからこの教会に来ていたそうです。帰りには近くでとれた若布をお土産にいただきました。

帰路は淡路サービスエリアに立寄りお土産物などを買った後、19 時過ぎに衣笠教会に戻りました。目的地での滞在時間が少なかった事もあり、他の教会の人との交流は十分ではなかったですが、バスの中での黙想などなかなか良い経験をしました。次の機会には北白川教会からも多くの参加者があることを期待したいと思います。

ひかりあれ **ひっぴ**さん by. うみぞう



### 編集後記

このたび、広報誌 Viator 9号の発刊となりました。前号に引き続き学生さんの積極的なご参加によってより良い広報誌に仕上がったと思います。今回は、今年に入って洗礼を受けられた方の中から2名の方に感想を頂きました。今回載せられなかった方のご感想は別の機会に企画したいと思います。また、執筆された方は写真を増やすことで臨場感のある原稿を意識して下さいました。さらに、初めての試みとして4コママンガを投稿して頂きました。今後も、若い方の積極的なご参加を期待しております。ご一読頂き、執筆者には是非お声をかけていただければ幸いです。広報誌が皆様の情報交換の場になれるよう努力いたしますので、今後とも広報活動にご協力のほどお願い申し上げます。

2014年10月26日

広報部一同